

去る10月25日に開催された町民大学の防災講演会では、群馬大学大学院の片田敏孝教授に貴重なお話を伺いました。講演の要旨は次のとおりです。

●犠牲者ゼロを目指して

高知県は津波に対して不利な地形。津波のエネルギーが湾の外に出て行かないため、長い間繰り返して大津波が襲う。適切に避難し、避難したら安全が確認できるまで元の場所に戻ってはいけない。「あんな大きな津波に襲われたのに、なぜ犠牲者が出なかったのだろう」と言われる地域になつてほしい。



津波災害に備える～津波犠牲者ゼロを目指して～と題し、津波防災の心得を訴える片田教授

●津波被災地の悲しみ

スマートフォンで津波被災地直後に現地で行なつた。

多くの遺体が残されているらしく、あたりに死臭が漂う。幼い子どもを失った母親は「あの子に一度も腹一杯食べさせてあげられなかった」と悔やむばかり。無惨な遺体は何度も見ていけば慣れるが、人々の悲しみには、何度見ても慣れることはない。

●なぜ、人は危機に備えようとしなの？

防波堤に囲まれ、日常的な災害は無くなった。これはいいことだが、百年サイクルで襲うような災害からは守りきれないことを知り、非日常的な災害には住民の柔らかなでしなやかな対応が必要ということを理解すべきである。これが災害文化。自然の大きな恵を受けるといふことは、自然と密接に付き合うということ。時に起こる災害をしのぐ術・知恵、災害文化を世代間で自動継承していく仕組みを築いてほしい。

津波災害をやり過ぎすには、逃げればよい。しかし、実際は逃げない。「正常化の偏見」という言葉がある。危険が迫っても「自分は大丈夫」と考えてしまう。今、大きな地震が起きたとする。机の下に隠

れ、避難し、さらには救助活動をしていると考えるが、自分が瓦礫の下敷きになっていくことはイメージしない。人は自分が死ぬと思えない。

●オオカミ少年効果

昨年と今年、千島列島沖で地震が発生した。津波警報が発表され、沿岸各地には避難勧告などが出された。オホーツク海沿岸では過去に津波警報が発表されたことがなく、避難率が比較的に高かった。しかし2回目は、避難率が激減した。いわゆる「オオカミ少年効果」だ。たった1回外れただけで、この結果である。こういった性質は、人間の本性のようなものである。

●逃げておけばよかった：

逃げないことの大きな理由のもう一つは、「認知的不協和」だ。逃げていない自分を正当化する理由を探してしまふ。「前も大丈夫だった」「隣が逃げていないから」などその理由はなんでもいい。避難しなかったけど大丈夫だったという経験が繰り返され、警報でも避難しなくなる。「逃げなくてよかった」を繰り返す、最後の一回だけ「逃

げておけばよかった」と思う。すなわち死んでしまう。この状況から抜け出すには「何もなかったけど逃げておいてよかった」という考えを持ち、子どもや孫たちに引き継がなくてはいけない。本当に津波が来たときに「やっぱり逃げておいてよかった」と言えるようになろう。

●津波防災は心の問題

津波防災は心の問題。自分との戦いである。逃げるには照れもあるし、勇気もいる。避難しなかった人は、避難しないと決めていたわけではない。避難できずにいただけ。結果的に、避難していかない事実が残る。最後の一步を踏み出せない人間の性質を踏まえどうするか、それが津波防災の課題だ。誰がやるべき？という議論はいらぬ。誰ならできるか。地域で取り組む。最後の一步を担う「率先避難者」を自主防災組織で役員として任命しよう。役割だから恥ずかしがらず、逃げることもできる。炊き出しなど被災後の対応を考えるのではなく、被災しない取り組みを地域で進めてほしい。

伊田分団が優勝! — 幡多中央地区消防連合会総合訓練 —

11月11日に西南大規模公園佐賀東地区グラウンドで開催された総合訓練に、四万十市と黒潮町管内の消防署員と消防団員が一同に会し、実戦型放水競技に参加しました。競技結果は以下のとおりです。小型ポンプの部は黒潮町消防団が1位から3位まで独占するという大活躍でした。

- 【小型ポンプの部】1位 黒潮町消防団伊田分団、2位 同拳ノ川分団、3位 同鞭分団
- 【ポンプ自動車の部】1位 四万十市消防団員同分団、2位 同大宮分団、3位 黒潮町消防団佐賀分団



伊田分団のみなさん

このページの記事に関するお問い合わせは、本庁総務課消防防災係 ☎43-2112(直通)または、佐賀総合支所総務課総務係 ☎55-3113(直通)まで。